

書写構江遺跡

(坂本城跡第21次発掘調査報告書)



調査地と書写山（南から）

2019

姫路市教育委員会

1. 調査に至る経緯・事業の経過

姫路市書写字構江 2473 番 6 において、宅地造成工事が計画された (図 1・2)。計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である坂本城跡 (県遺跡番号 020134) 及び書写構江遺跡 (県遺跡番号 020814) に一部該当することから、平成 30 年 4 月 19・20 日に試掘・確認調査 (20 次調査・調査番号: 20180039) を実施したところ、ピット等の遺構を検出するとともに布目瓦が出土した。これらは坂本城跡より古い時代のものであったため、書写構江遺跡として取扱うものとし、工事範囲のうち 90 m²を対象に本発掘調査 (調査番号: 20180156) を実施することになった。平成 30 年 7 月 5 日に事業者と発掘調査委託契約書を締結し調査を開始した。現地調査に要した期間は、平成 30 年 7 月 24 日から 8 月 20 日であった。現地調査終了後、整理作業及び発掘調査報告書の作成を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。調査体制は以下のとおりである。

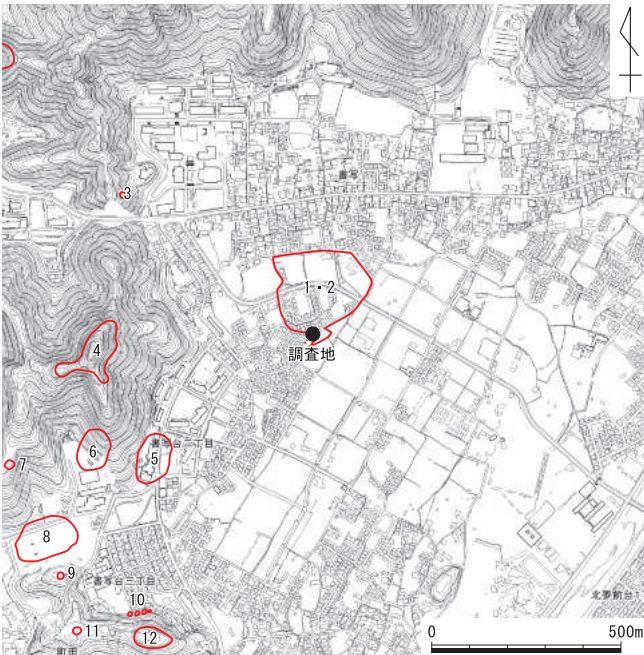
姫路市教育委員会
 教育長 松田克彦
 教育次長 名村哲哉
 生涯学習部
 部長 岡田俊勝

文化財課
 課長 花幡和宏
 課長補佐 大谷輝彦 (調整)
 技師 黒田祐介 (調整)

埋蔵文化財センター
 館長 前田光則
 課長補佐 岡崎政俊 (庶務)
 係長 森 恒裕 (調整)
 技術主任 南 憲和 (調査・整理)

2. 遺跡の周辺環境

書写構江遺跡は書写山 (標高 371m) の南側、山麓から南に広がる扇状地の南端に位置し、東は夢前川が形成した低位段丘の端部に接する。書写山麓では既往調査等により弥生時代以降の遺跡・遺構が知られる。本遺跡の第 8 次調査では弥生時代後期の円形周溝墓が検出されている (註 1)。古墳時代には西方の天神山を中心として古墳が築造された。その西側に位置する峰相山窯跡群では 6 世紀後半から 9 世紀初頭にかけて須恵器が生産され、7 世紀末から 8 世紀代には一部で瓦も併焼された。康保 3 年 (966)、性空上人は書写山中に庵を結び円教寺を開山した。円教寺は国司・摂関家の援助を受けつつ伽藍が整備され、11 世紀前半には国司・国衙の祈願寺の地位を獲得していたとみられている。本遺跡の第 1 次調査では平安時代後期の掘立柱建物跡等が検出されている (註 2)。室町時代には播磨守護赤松氏が支配拠点の一つとした坂本城が存在し、既往調査でも土塁・堀等の遺構が確認されている。



1. 坂本城跡 2. 書写構江遺跡 3. 城山遺跡 4. 天神山城跡 5. 天神山 1 号墓～9 号墳
 6. 天神山窯跡 7. 天神山 10 号墳 8. 町田池遺跡 9. 養尾山 5 号墳
 10. 養尾山 1 号墳～4 号墳 11. 養尾山中世墓群 12. 養尾山弥生墳墓群

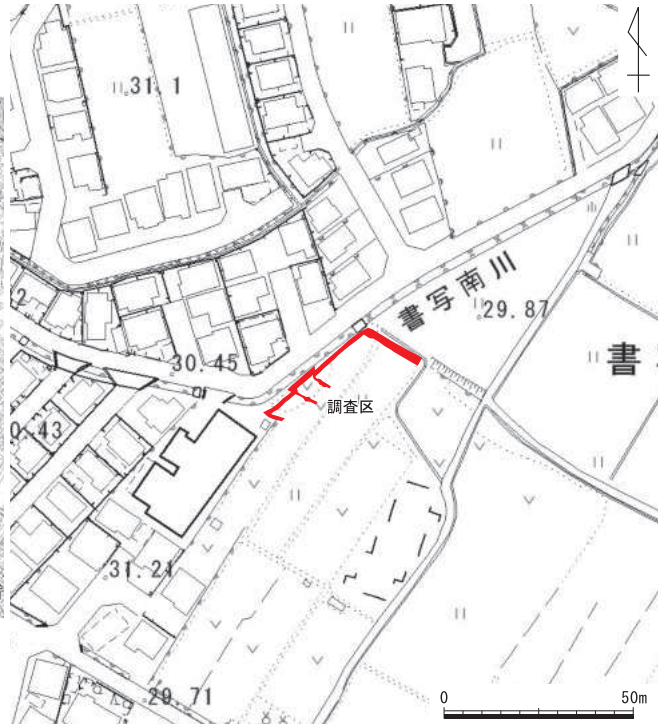


図2 調査区位置図 (S=1 : 2,000)

図1 坂本城跡・書写構江遺跡と周辺遺跡 (S=1 : 20,000)

3. 調査の成果

調査区は東から西に1～5区とし、そこから分岐するものを6・7区と呼称した。2～4区は段丘上に位置し現況でT.P. 30.3m前後を測る。基本層序は、表土・耕土(約25cm)、黄橙色シルト質粘土(約5cm)、灰黄褐色シルト質粘土(約10cm)、灰黄褐色シルト質粘土(約10cm・遺物包含層)を経て、暗灰黄色～黄色シルト質粘土(基盤層)に至る。1区は段丘下に位置し大半が旧河道(SR01)であったとみられ、灰白色粘質土(基盤層)はT.P. 29.1mで現出した。2区、4区西半から5区、6・7区の南半は旧水路(一部コンクリート製)の攪乱により基盤層が大きく掘削されていた。遺構は基盤層上面で検出し、溝1条(SD01)、土坑1基(SK01)、ピット1基(SP01)、旧河道1条(SR01)がある(図3)。このうち、遺物がまとまって出土したのはSD01に限られるため、本遺構について報告する。

SD01は3・4区間で検出した。幅約2.0m、検出面からの深さは70cmを測り調査区外に延びる。溝状の土坑の可能性もある。埋土は6層に分層され、1・2層を上層、3～5層を中層、6層を下層と便宜的に区別した(図3)。上層の遺物は少なく、1層から平安時代後期から鎌倉時代頃の瓦器羽釜(図4-1。以下、遺物番号は通し番号のみ記載する)、瓦小片のほか窯体(写真2)が出土した。中層(3層)と下層からは瓦が一括廃棄された状態で出土した(図3、写真図版)。中層には焼成不良の小片を多く含んでいた。中層(2～13)及び下層(14～27)から出土した瓦の種類は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。中層と下層の瓦では顕著な型式差が認められず、ともに変形、亀裂が生じたものが目立ち、中層からは融着した平瓦が出土した(写真2)。胎土は総じて粗く、砂粒及び白色粘土の小塊を含む。

軒丸瓦 中層の瓦(2)で径17.2cm、下層の瓦(14)で径16.4cmを測る。両者は別個体であるが、瓦当文様は同文の複弁四葉蓮華文に復元される。文様に重複する部分はないが、瓦当裏面の形状から文様の部位を推定し合成したものが写真図版に示した参考図である。このような文様の類例は管見の限り確認できなかった(註3)。瓦当裏面には布目圧痕が残り、下半部に周縁突帯が認められないことから、横置型成形台による一本作りの可能性がある。

丸瓦 玉縁及びその連結部が破片を含めて確認できないため、行基式の可能性が高い(3・4・15～18)。凸面は1次成形痕を丁寧にナデ消す。側面のケズリは丁寧に施されるが、凹面側縁のケズリは浅く部分的である。18の凹面には布目に後行する幅約1cmの棒状タタキが施される。15の凸面中央部には逆「ノ」字状のヘラ描きが見られる。

平瓦 最も多く出土した。以下、表1に示した資料について述べる。凸面にはハナレ砂の付着が顕著に認められる。タタキの種類は縄目タタキ、斜格子タタキ、平行タタキに大別される。量的には縄目タタキと斜格子タタキでほぼ二分され、平行タタキは少量に過ぎない。タタキの方向は平行タタキが円弧状(6)又は不定方向(7)、縦位(10)に施されるが、縄目タタキと斜格子タタキは全て縦位である。斜格子タタキは2種類(A類・B類)が認められる。A類は菱形又は平行四辺形状の大型のタタキ目(一辺3.0cm程度)を有す(12・22～24)。B類はタタキ原体(幅4.0cm以上)に3～4本単位の平行線が斜交する部分と1～2本の斜線が交差する部分が併存し、その連続により大小の斜格子・「×」状の模様を残す(13・25～27)。格子目は大型のもので一辺約3.5cmを測る。側面のケズリは、凹面に対して鋭角に削るものをa類、直角に削るものをb類、「∟」状に2段階に削るものをc類、「┌┐」状に3段階に削るものをd類に分類した。このうちa類が70%を占める。ただし、側面の3/4以上を削るものは40%に満たず、布目が凹面から側面に巻き込むことが観察されるものが約90%に達する。布目の巻き込みは深いもので側面から凸面側縁まで及ぶものもあり、端面(9・21・22・24～26)にも観察される。凹面に布目に後行する正格子タタキ(一辺5～6mm)が施されるもの(8・9・12・22・26・27)が20%程度存在することも特徴的である。凸面端部には凹型成形台の痕とみられる段差が残るもの(5・10)もある。このような点から、基本的に凸型台で1次成形後、凹型台に移して2次成形・調整を行った一枚づくりによる製作と考えられる。

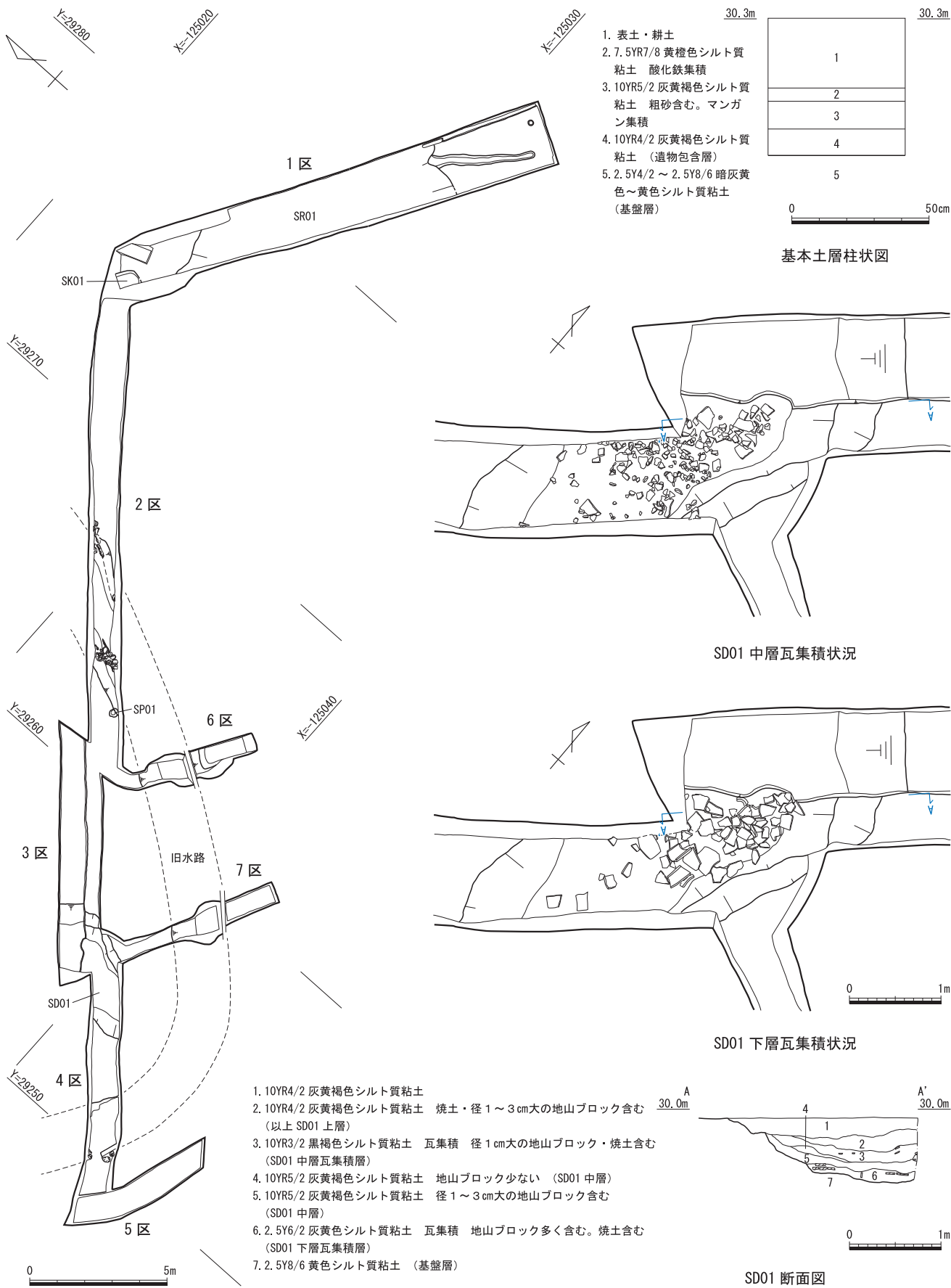
その他遺物 下層から土師器の管状土錘(28)が出土した。時期は不明である。



写真1 2～4区(東から)



写真2 融着した平瓦と窯体



1. 表土・耕土
2. 7.5YR7/8 黄橙色シルト質粘土 酸化鉄集積
3. 10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土 粗砂含む。マンガン集積
4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土 (遺物包含層)
5. 2.5Y4/2 ~ 2.5Y8/6 暗灰黄色~黄色シルト質粘土 (基盤層)

1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土 焼土・径1~3cm大の地山ブロック含む (以上SD01上層)
3. 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 瓦集積 径1cm大の地山ブロック・焼土含む (SD01中層瓦集積層)
4. 10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土 地山ブロック少ない (SD01中層)
5. 10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土 径1~3cm大の地山ブロック含む (SD01中層)
6. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質粘土 瓦集積 地山ブロック多く含む。焼土含む (SD01下層瓦集積層)
7. 2.5Y8/6 黄色シルト質粘土 (基盤層)

図3 調査区全体図 (S=1:200)、基本土層柱状図 (S=1:20)、SD01中・下層瓦集積状況平・断面図 (S=1:60)

4. 総括

今回の調査では既往調査で確認されていた弥生時代及び坂本城跡の遺構・遺物は検出されなかった。このため、ここでは遺物が唯一まとまって出土したSD01について、その性格、時期等の検討を行うものとする。

SD01 から出土した瓦には変形や亀裂が生じたものが目立ち、融着した瓦を含む点、窯体が出土した点、須恵器を含まない点を考慮すると、調査地の近傍には瓦窯が存在し、その不良品を廃棄した溝又は土坑の可能性はある。

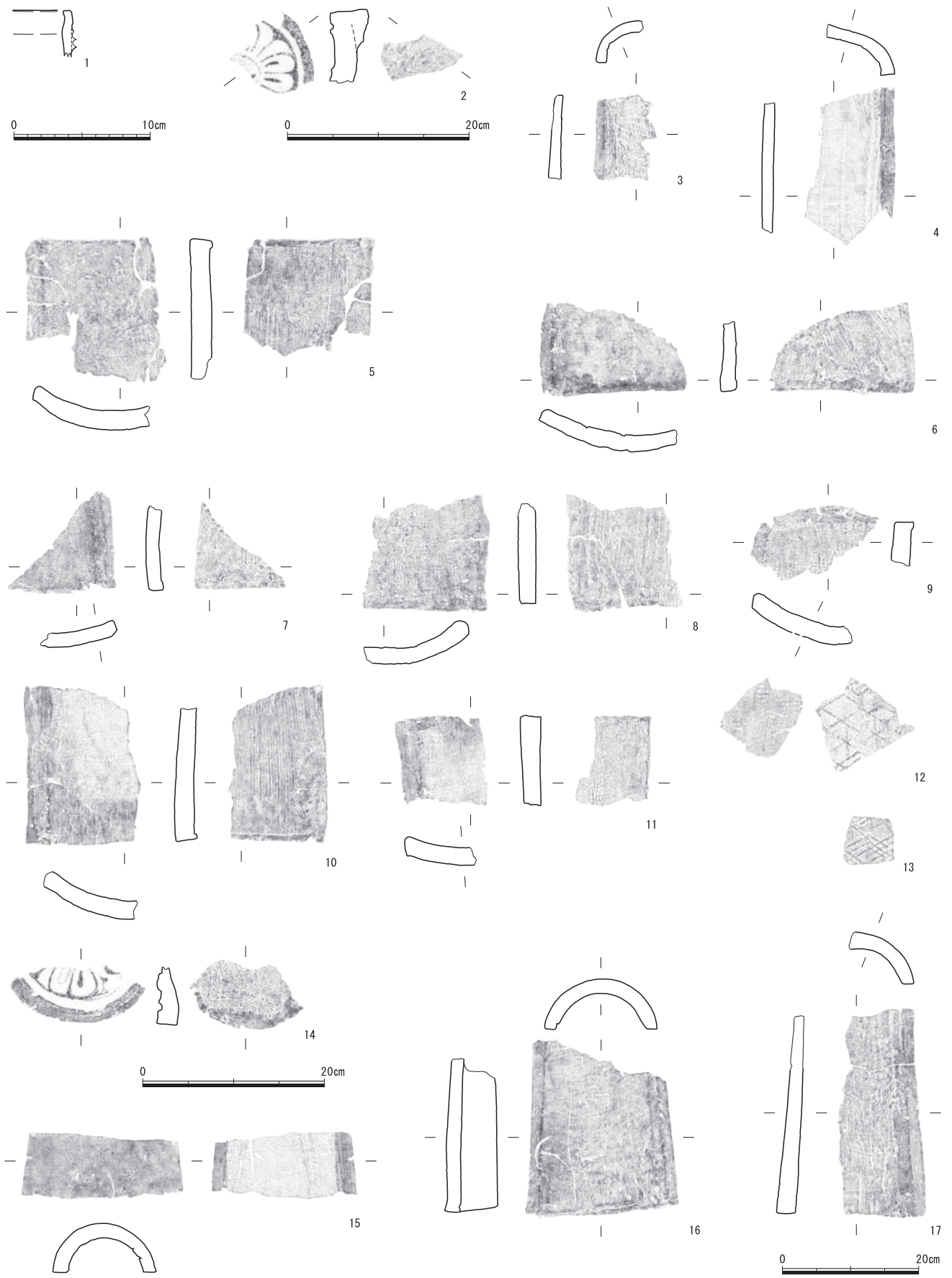
瓦の時期は、複弁四葉蓮華文軒丸瓦に同文の類例が確認されないため、これについては資料の増加を待つ検討することとし、ここでは一定量出土した平瓦を中心に製作技法から検討したい。平瓦の凸面にハナレ砂が顕著に付着することからみて8世紀中葉以前には遡りえない。平瓦凸面の斜格子タタキA類・B類又はこれに類する大型の斜格子タタキは、姫路市内では今宿遺跡(註4)と姫路城跡第338次調査(註5)で出土している。前者の時期は不明であるが、後者は概ね8世紀代とされるSD104一括出土瓦の中にB類に類似した型式が一定量含まれる。小犬丸中谷廃寺(たつの市)(註6)の平瓦i型式は斜格子タタキA類と比較すると細部に違いはみられるが、凹凸両面にタタキが施される点など技法的な特徴はよく似ている。平瓦i型式とセットで使用したとされる行基式の丸瓦I型式も本遺跡のものと同様である。小犬丸中谷廃寺ではこれらの時期を8世紀第4四半期頃から9世紀初頭の間としている。また、複弁四葉蓮華文軒丸瓦は横置型成形台による一本作りの可能性があり、この場合は8世紀中頃から平安時代中期(註7)の製作とされる。以上を総合すると、奈良時代中頃から平安時代中期頃のものと考えられる(註8)。

なお、瓦窯跡の有無については周辺の調査を待つほかなく、瓦の類例及び供給先を含めて今後の課題としたい。

- 註1 姫路市教育委員会 2001『坂本城跡』『TSUBOHORI』平成11年度(1999)姫路市埋蔵文化財調査略報
 註2 山本博利 1983『書写坂本城跡発掘調査の概要』『兵庫県歴史』第19号による。この調査では平安時代後期の土器とともに同時期の複合鋸歯文をもつ軒平瓦が出土した(今里 幾次 1995『小野市長尾寺の古瓦』『播磨古瓦の研究』)とされる。
 註3 本資料のように外区が無文の直立縁を呈し、間弁がゆったりと配置され、その両端が界線状になる複弁四葉蓮華文軒丸瓦は、房王寺廃寺(神戸市)で確認され(大脇潔 2015『瓦からみた西摂の古代寺院』『地域研究』第44号)、奈良時代後半以降と推測されるが、拓本を見る限り子葉の形状、蓮子の数に違いがあり同文と認めることは困難である。
 註4 兵庫県教育委員会 2008『今宿遺跡1』兵庫県文化財調査報告第333冊による。K23類が斜格子タタキB類と同型式とみられ119点(18.68kg)出土している。
 註5 姫路市教育委員会 2017『姫路城跡下町跡-姫路城跡第338次発掘調査報告書-』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第43集
 註6 兵庫県教育委員会 2006『小犬丸 中谷廃寺・中谷遺跡』兵庫県文化財調査報告第306冊
 註7 毛利光俊彦 1991『平城宮・京出土軒瓦編年の再検討』『平城宮発掘調査報告XIII』奈良国立文化財研究所学報第50冊
 註8 兵庫県立考古博物館の池田征弘氏、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターの垣内拓郎氏に本資料を実見して頂いた結果、全体的な成形・調整に簡略化が認められる点を評価すると、この時期幅の中でも平安時代前期から中期に下る可能性があるとのご教示を得た。

報告番号	層位	凸面タタキ ()は1条の幅	側面ケズリ	布目の凹面から側面 への巻き込み	凹面 格子タタキ	備 考
5	中層	細目(1.5mm)	a(下半のみ)	○		
6	中層	平行(3mm)	b(全面)	○		
7	中層	平行(3mm)	b(全面)+凸面側縁	○		
8	中層	細目(1mm)	a(上端から1/3を除く)	○	○	
9	中層	細目(1mm)	a(上端から1/4を除く)	○	○	
10	中層	平行(2~4mm)	a(下半のみ)	○		側面と端部の角部を隅切り状に削る
11	中層	細目(1.5mm)	a(下半のみ)	○		
	中層	斜格子	c(上端から1/4を除く)	○		
	中層	斜格子B?	b(全面)+凸面側縁?磨滅が著しく詳細不明	不明		
	中層	細目(1mm)	a(下半のみ)	○		
	中層	細目?	a? 磨滅が著しく詳細不明	不明		
	中層	斜格子?	ほぼ未調整(凹面側縁を面取りに弱く削る)	○		
	中層	斜格子?	a(上端から1/4を除く)	○		
	中層	斜格子B	a(下半のみ)	○	○	
19	下層	細目(2mm)	c(全面)+凹面側縁	○		広端面と側面の角部の両端を隅切り状に削る。広端面は2段階のケズリ
20	下層	細目(2mm)	a(全面)及びd(全面)	○		
21	下層	細目(2mm)	d(全面)	○		
22	下層	斜格子A	a(下半のみ)	○	○	
23	下層	斜格子A	a(下半のみ)	○		側面と端部の角部を隅切り状に削る
24	下層	斜格子A	a(全面)	○		
25	下層	斜格子B	a(下半のみ)+凸面側縁	○		側面と端部の角部を隅切り状に削る
26	下層	斜格子B	a(上端から1/3を除く)	○	○	
27	下層	斜格子B	a(下半のみ)	○	○	側面と端部の角部を隅切り状に削る
	下層	細目(2mm)	凸面側縁のみ	○		
	下層	細目(1mm)	a(下半のみ)	○		
	下層	細目(2mm)	a(下半のみ)	○		
	下層	細目(1mm)	a(下半のみ)	○		
	下層	斜格子B	a(下半のみ)	○		
	下層	細目?	a(下半のみ)	○		
	下層	細目(2mm)	b(全面)+凹面側縁に弱いナデ	○		側面と端部の角部を隅切り状に削る
	下層	不明	a? 磨滅が著しく詳細不明	不明		
	下層	斜格子B	a(下半のみ)	○	○	端面は2段階のケズリ
	下層	細目(1.5mm)	a(下半のみ)	○		
	下層	不明	a? 磨滅が著しく詳細不明	不明		
	下層	斜格子A	dの上1/3は未調整	○		端面は2段階のケズリ
	下層	不明	a(下半のみ)	○		
	下層	斜格子A	c(全面)	○	○	
	下層	細目?	a(全面)	○		
	下層	平行?細目?	a(下半のみ)	○		
	下層	細目(2mm)	ほぼ未調整(上端から1/3・凸面側縁を弱く削る)	○		側面と端部の角部を隅切り状に削る
	下層	斜格子	c(全面)	○		
	下層	斜格子B?	a(上端から1/3のみ)	○		
	下層	細目(2mm)	a(全面)+凹面側縁を面取り状に弱く削る	○		側面と端部の角部を隅切り状に削る

表1 SD01出土平瓦観察表 (※コーナ一部を有し、タタキの種類、側面等の整形技法が判別できる43点を対象とした)



※1はS=1: 4、2・14はS=1: 6、それ以外はS=1: 8

図4 SD01出土遺物実測図・拓本 (1)

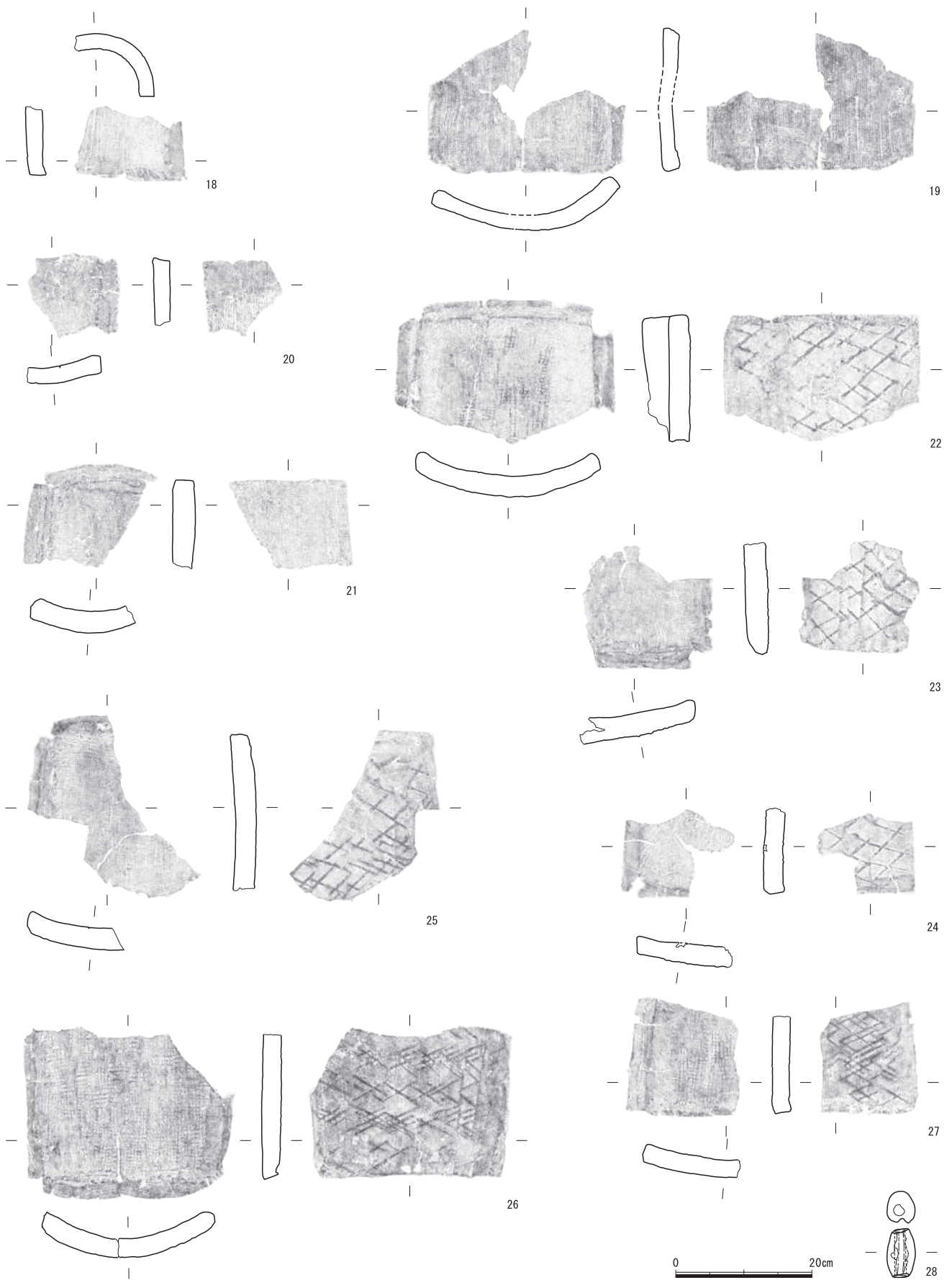


图5 SD01出土遺物実測図・拓本 (2)

写真図版



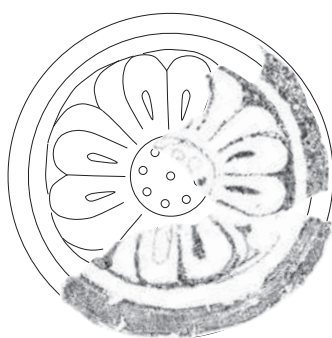
SD01 断面（北東から）



SD01 中層瓦集積状況（北東から）



SD01 下層瓦集積状況（北東から）



2・14（拓本合成による参考図）



2（瓦当）



2（瓦当裏面）



2（瓦当断面）

遺構・遺物写真

報告書抄録

ふりがな	しよしゃかまえいせき（さかもとじょうあとだい21じはっくつちようさほうこくしよ）							
書名	書写構江遺跡（坂本城跡第21次発掘調査報告書）							
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第79集							
編著者名	南 憲和							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1				TEL (079) 252-3950			
発行年月日	平成31年（2019年）3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
しよしゃかまえいせき 書写構江遺跡	ひようごけんひめじしよしゃ 兵庫県姫路市書写 あさかまえ 字構江2473番6	28201	020814	34° 52′ 21″	134° 39′ 12″	2018. 7. 24 ～ 2018. 8. 20	90㎡	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		遺跡調査番号
書写構江遺跡	集落跡・墓	弥生・奈良時代		溝		瓦		20180156

例言

1. 本書は、姫路市書写字構江 2473 番 6 で実施した書写構江遺跡（坂本城跡）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社あさひ土地から委託を受け、姫路市が実施した。
3. 調査は姫路市埋蔵文化財センターの南憲和が担当した。
4. 本書の執筆・編集は南がおこなった。
5. 調査に関する写真・図版等の調査記録、出土品は姫路市埋蔵文化財センターが保管している。
6. 標高値は、東京湾平均海面（T.P.）を標準としている。方位は座標北を示す。
7. 土層名の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に準拠した。
8. 遺構は、原則的にアルファベットと数字を組み合わせた番号で表記した。略称は、SD＝溝、SK＝土坑、SP＝ピット、SR＝旧河道を表す。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第79集

書写構江遺跡（坂本城跡第21次発掘調査報告書）

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1
発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地
発 行 日 平成31年（2019年）3月31日
印刷・製本 株式会社デイリー印刷
〒671-0218 兵庫県姫路市飾東町庄57-2